
痛みとウサギと追いかっこ

こぎん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

痛みとウサギと追いかけて

【Nコード】

N9719Y

【作者名】

こぎん

【あらすじ】

少年は異世界に迷い込んだ、勇者と魔王でもない第3の存在として、

世界征服しちゃいなよ！あとついでに神様も殺っちゃいなよ！そうすれば君は神様だ！

そんなかんじで世界征服始まります。

プロローグ

「あと・・・5分だけ・・・」

いや、わかってるんだ

ここが自分の部屋じゃないことくらい

「現実逃避してても始まらないか」

目を覚ますとそこは金の苔のベットとよくわからない木の根が見える壁に囲まれた洞窟だった。

それにしても夢ではなさそうだなあ

つねった頬が痛いや・・・

苔で覆われてるけどこのふかふかしたベッドみたいなのは何なんだろうか・・・

ああとっても気持ちいいなもう一眠りしてもいいかな？

ごめんよ、パ○ラッシュとっても眠いんだ・・・

そのままもう一度夢の中へ落ちていった

俺はたしか翌日が休みって事もあって最近熱中しているRPGゲームをしていて

気がつけばもうすぐ3時って時間までやりこんでいた

明日、というか今日は友達と一緒に旅行に行く約束をしていたので睡眠を取らないとダメだと踏んで布団に入ったはずだったんだった

「ふっ、認めたくないものだな二度寝したのにも関わらずまったく状況が変わってません！実は夢でしたーっていう夢落ちを期待したんだけど」

俺はいつもどおりジーンパンに通気性のいいTシャツというラフな部屋着だった

「そういえば寝巻着は着てたはずなんだが」

寝間着よりかはマシなのでうろついてみようかな

これはまたマイナスイオンがたっぷりと補充できそうな・・・ジャングルですね

そして目の前に自分の身長＋20cmくらいの向日葵にしか見えな植物が生えていた

おれの身長は170くらいだから十分育った向日葵なんだなあ
周りの木が日の光なんて遮ってて他の植物がほとんど無く苔がはえているのにもかかわらずその向日葵はとてもキレイな大輪の花を咲かせていた

怪しいと思いつつも近寄ると向日葵が『嗤った』

これはやばい

とつさに後ろに下がろうとしたが手に噛みつかれてしまった

「ぐっ・・・はなせっ！」

「ギャー」

無理やり向日葵を引っ張るとあっけなく向日葵は途中からちぎれて動かなくなった

「いつから向日葵はこんなに活発に栄養を求めるようになったんだよ」

栄養が少ないのかそれともともと肉食植物なのか

幸い腕の傷はかすり傷程度ですんでいた

「こんな向日葵でも種は食用になったりしないかな・・・」

痛みより食欲が勝った瞬間だったがしばらく種等を観察していると向日葵は小さな紅い石のようなものを残して消えてしまった

キレイな石だったのでそれをポケットに入れると壁伝いに歩いていった

「RPGならお金とか薬草とか落としてくれるはずなのに石ってどういうことなんだ」

しばらく歩くと滝がありここを下っていけばきつと人のいるところ

に着くだろうと川沿いに歩いて数分後

遠くから金属のこすれる音、と多くの足音が聞こえてきた

ここはまず日本であるわけが無いというより地球であることすらあやしい・・・

そんな所で金属の音十足音って言われても安心できないむしろさっきの向日葵みたいなモンスターの可能性もある

さてここで問題です

俺はどうすればいいでしょうか？

1 何かの大群に助けを求める

2 このまま隠れて様子をみる

3 見つかる前に別の道を探して逃げる

俺は2を選ぶ！

1は論外うかつすぎる、3は見つかる可能性が高い、2ならばダンボールで敵の目を欺く作業員もいることだしきつといける！

おっと来たみたいだ

何を言ってるのかわからないけど馬？に似た動物に乗り両刃の剣を
持ったおっさんが何か叫んでる

「イーツ？ ニョルニンド？」

ダメだ、日本語でないどころか英語ですらなさそうだ・・・実は英
語で俺がヒアリングできてないだけという可能性は無きにしも非ず

「よし、行っただな」

ますます異界である可能性が高まってるんだけどここで捕まったら
解剖されてB A D E N D？

「うわぁ・・・これってフラグ？」

がさがさ・・・がさがさ・・・

「!?!?!」

そこには簡単に言えばデフォルトキャラクター

間違ってもかわいいとは呼べない生物、

耳に傷があり、手にはキセル、背中に秋刀魚を背負ってるウサギ
という3頭身しかないモノがそこにいた

「l s 5 r k 2 5 2 l f s 3 4。 s m v k」

今度はまったく理解できない言葉だったが敵意は感じられない

「えっとここはどこで町はどっちでしょうか？」

そのデフォルトキャラクターはおもむろに手？を輝かせると

鳩尾に強烈なボディーブローを決めた

「ぐふっ……げぼげぼ……」

「いえ……わしのこぶしはひやくまんぼる←と→じゃけえのお・・
」

デフォルトキャラクターに殴られたとたんに奴の話している言葉が
理解できるようになった

「あー、なんで殴られたのかとか聞いてもいいかな？」

「おう！ぼーず！いいしつもんだあ……それはなそこにいぶ→ん
か←こう→りゆう→があるからよお！」

「うん、わからん。まあ言葉が通じるようになったのは感謝するよ」

「ぼーず！ここであつたのも何かの縁だ！ええもんやろか！て→ー
だしな」

「そーいやぼーず！てめえの名前はなんてえんだ？」

「俺の名前は森 修・・・」

「だまらっしゃい！」

「へぶっ」

あれ、自分の名前を言おうとしたら突然殴られたよ？痛みは無いけど口の中切ったみたい鉛の味がする

「あんたみたいなのは名無しで十分なんだよっ」

どうしよう、いきなり俺の名前は名無しになったようです

「って、人の名前をいきなり改名してんじゃねえよ！俺には修一ってなm・・・」

「せか→んど←ふり→すき→ー！！！！」

「ぐはっ」

「おいらぁ→呼ぶときは疾風のジョーって呼べ→やぁ→」

「おか・・・しい・・・だろ・・・」

デフォルメキャラクターのアップで俺の意識はそこで途切れた。

その1 R P Gの基本は情報収集から

あの不思議な生き物に殴られてからのくらい時間がたったのかわからないが太陽の位置から大体昼過ぎだと判断する

ここが異世界なのはよくわかったけどこれからどうすればいいのだろうか

変な生き物のおかげで言葉は通じるようになってるみたいだし

R P Gの定番からするとこの世界の魔王的なラスボスを倒せば元の世界に返れたりするんだろうけどそういった場合大抵は、召還されて

「おお異世界からの勇者よ！ 私たちのために魔王を倒してくれ！」

ってのがお決まりなはずなんだけど

と視線を感じて後ろを振り向くと

これが山賊です！ っていう皮の装備に身をつつんだマッスルさんがびっくりした顔で立っていた

「えっと・・・どこから見えました？」

振り向いた状態で問いかけてみる

「あーるピージーのていばんからって所あたりから」

ふむ、心の中の眩きのはずが口から漏れていたらしいわっ！ ハズ

カシ！

体ごと振り返って咳を一つ、きっと自分の顔は真っ赤なんだろうねー

「オホン！・・・初めまして、町はどちらでしょうか？」

数人いた山賊が全員一定方向を指差してくれた。

「ありがとうございます！では！さっきのは忘れてください！」

では！のあたりですでに全力で指差した方向へダッシュしている。

「お、追えッ！逃がすんじゃないよ！」

後ろの方から追っ手がやってくるのがわかる。

もしかしたらこのまま逃げ切れるかもなんて都合のいい考えだったようだ。

すぐに追いつかれて囲まれてしまう。

振り返って一人に話しかける

「えっとお金なんて持ってませんよ？」

とりあえず金銭を持ってないことを自己申告

「俺等は金が欲しいだけじゃねえんだ」

「・・・何が欲しいんです？」

「全部だよ、とりあえず《イーツ》について知ってることを吐きな
イーツ・・・そういうばさつきそんな単語を聞いたな。

「それなら向こうへ向かう集団がそんなことを言っていましたね、それ以外は知りませんよ」

「そうか、ならてめえは用済みだ、こんなところでゴブリン共の餌にするより奴隷商にでも売って俺等のために金に換えてやるとするか！」

困った！大ピンチだ

自分の周りにはさつき話して奴を含めて4人、ナイフを持ってるから一気に襲われたらひとたまりも無い

となると

「先手必勝！」

大声で叫んで走り出す一步を踏み込むその瞬間前にいた2人はナイフを構えて腰を落とした

それを確認すると後ろへ全力で飛ぶ肘が右にいた山賊の顔に当たり倒れる、

そのまま右へ方向転換して走り出す。

少し距離が開いたところで足元の地面が消え俺は落ちた。

落ちた高さとしては1mくらいだろうかそこから急な坂になっておりここまで転げ落ちてきた

周りの壁は自然とできたにしては整いすぎているところからみてきつと人の作ったものなのか魔物の巣なのかのどちらかだと思う

「いてて・・・ここは地下か」

周りの苔が薄く発行しているので真っ暗とまではいかないが見える範囲はせいぜい2メートルも無いだろう

向日葵のような生物がいなくても限らないので落ちて乾燥していた根っこの切れ端を持って出口を探して彷徨いだした

細い通路を歩いていると前の方から子供くらいの大きさの影が複数こっちへ向かっていた慌てて近くのわき道に隠れると

所謂 《ゴブリン》 と呼ばれるモンスターがゴフ！ゴフ！と言い

ながらゆつくりと通り過ぎていった。

「ゴブリンということは魔物の巣で間違いなさそうだな。」

さっきの山賊が言っていたことを信じるならゴブリンは肉食でパクリといかれちまうそうだ。

ほんと、この世界はいろんな意味で退屈させてくれないな、ご飯にされそうになったり、奴隷にされそうになったり

さっきのゴブリンとは逆の方向へ向かうと少し開けた場所に出た

そこにはゴブリン4体とひときわでかいゴブリンのリーダーのようなのが2体の合計6体がいた

さてこの世界の基準は知らないけど俺の知っているRPGならゴブリンはチュートリアルにでてくるような雑魚扱いなんだが

ゴブリン達の装備は棍棒と木の棒かなリーダーの方はナイフのようなものを持っている

今俺の武器はずっと持ってる乾燥した根っこと『安全靴』だ

普通の一般人は日頃安全靴なんて履いてないと思うんだが

俺の場合は過去に細い道でトラックとすれ違ったことがありその時に靴をタイヤにはさまれたことがある少し大きめの靴を履いていたこともあり骨折どころか怪我も無かったんだがその頃から安全靴を履くようになった。

ただし所々手が加えてあつて走っても不自由が無いようになってい
る。

手を加えてない安全靴で走ろうとしたことがあつたがその時は鉄板
の端が足の甲などに当たりとても痛かった。

さてまずは6体いっぺんに相手をする と 確実に負けるだろうからで
きれば2体くらいをこちらにおびき寄せて片付けたい

ちなみにこの時の俺は『異世界』、『ダンジョンちっくな場所』と
いう二つの理由でハイテンションだった。

その部屋から少し離れると足元から石を拾い上げて投げる

カツンつと小さな音を聞きつけたリーダーゴブリンは下っ端4体に
命令を出して確認させに来た

一列にならんだゴブリンが狭い通路を歩いてこちらへやってきた。

ゴブリンは天井が少し崩れて音を立てたと判断したのだろう後ろを
向いたその瞬間

俺は後ろから根っこを振り上げて一番後ろにいたゴブリンになぐり
かかった。

根っこは折れて使い物にならなくなったが襲われたゴブリンは倒せ

たようだ。

いきなりの奇襲にゴ布林達は少しの混乱を見せているその間に殴り倒したゴブリンの持っていた棍棒を拾い上げるのと同時に2体目のゴブリンの顎目掛けて振りぬいた。

ゴツっという鈍い音を立てて2体目のゴ布林が後ろに飛んだ。

2体目のゴ布林は3体目のゴ布林とぶつかったところで俺は2体目のゴ布林を踏みながら3体目のゴ布林胸元に蹴りを入れた

3体目は4体目を巻き込んで後ろに転がった。

3体目のゴブリンの喉を思いっきり踏みつけて4体目のゴブリンの顎を蹴り抜く。

4体とも動かなくなったことを確認する4体とも腹が動いているところを見ると気絶しただけのようにだ、頑丈だな・・・ゴ布林

さっきの広場まで戻ってくると2匹のリーダーゴ布林達は広場の真ん中辺りにいた

まだリーダー2匹の他にはゴ布林は見当たらないがナイフぽいものを持った相手を二人相手するのはしんどいのでこっちに来てもらうことにしようか

作戦は石をリーダーに向かって投げると後ろの通路の曲がり角を曲がったところで待ち伏せる。

追ってきたリーダーが曲がり角を曲がったところで棍棒による一撃と蹴りで一匹しとめる

残り一匹も流れでしとめるといふ考えだった。

足元の石を拾い手前のリーダーに向かって投げる！走ってくるリーダーを曲がり角まで・・・って火の玉！？

リーダーは魔法なんて使えるのかよおー

曲がり角をまがった所で火の玉が壁に当たり火の粉を散らした。

俺はゴブリンが角を曲がりきる前に棍棒をフルスイングするとリーダーその1は頭を軸に半円を描いて地面に倒れた。

間髪入れず顎を全力で蹴り抜く！さっきのゴブリンとは違ってゴリっという手応え？足応え？があった

最後のリーダーはナイフを振り上げてこちらへ走ってくる棍棒の持ち手をぐっと握ると思ひ切り突き出した

リーダーその2は棍棒は叩くもので突くことは無いと思っていたよううで顔面に直撃する。

後ろに2、3歩下がったのでそのままの勢いで胸を蹴り飛ばす

1メートルほど飛んだのを確認し足元からリーダーその2が落としたであろうナイフばいものを拾い上げると起き上がろうとしている

リーダーの頭を蹴る

最後の一撃は靴の角がクリーンヒットしたらしくリーダーその2は転がっていった。

そのあと少し待っているとその1とその2は向日葵と同じように緑の石とナイフぱいものを残して消えていた。

「またこの石か今度は緑色って何かあるのかな」

とりあえずさっきの4体のゴブリンが戻ってくる前にここを離れるか

広場の奥にまた道を発見したのでそちらを進んで行くと鉱石のような石やきつとここでやられた人間の鎧と思われる物などが置いてあった。

「これは宝物庫だよな、となるとさっきのリーダーだと思ったゴブリンはここのボスだったのかな」

所々に金、銀のコインが置いてある！これはこの世界のお金かな

おれの中のRPGの鉄則

その1勇者とは家捜しするもの！

その2魔物の宝は勇者の物！

その3魔物と戦う時は全力で！

その4出会った魔物はとりあえず倒してみよう！

という鉄則があるのでとりあえず使えそうな物ををいただいていこう
ざっと見回すとコインの詰まった袋、ボロボロの鎧、何かの石
そして・・・腕輪？

必要なのはコインの袋の中に石を入れて腕輪を左手にはめる

「ちゃちゃちゃん！なぞのうでわを装備した！・・・もしかしてこれ単なる装飾品かな？」

こっちの鎧は使い物にならないな・・・というより着方もわからないや

宝物庫に入った時と出てきた時では見た目が少し変わったただけで実際の戦闘力に変化は無かった。

出口を探して彷徨っていると階段を見つけた！ただし下り・・・

降りてみると悪臭が漂っていた。

ここは牢屋のようだが人がいれば助けてみるかもしれないし
牢屋だけあって見張りがいるな2体だけかな？ならこのナイフだけでいけるはず

2体のゴブリンの内一人は椅子に座って眠っていた。もう一人はその近くに立っていた

階段に背を向けた瞬間にすばやく近づいて立っていたゴブリンの口を押さえながら首をナイフで切る。

寝ているゴブリンも同じようにして倒した。

ゴブリンたちが消えると牢屋の鍵だと思われる鍵束と棍棒と両刃の剣が残っていた。

牢屋に近づくと牢屋の中には鎖に繋がれた人型の影がいくつか見えた。

「大丈夫ですか？」

俺の声に反応して数人の声が聞こえる

「たすけ・・・なのか？」

「たすかったの？」

ふむ生存者がいたようだ、地下に出口は無いだろうからって理由で降りずに出口探索しなくて正解だった。

「すぐにここから出しますね」

生存者は4人

最初はもっと数がいたらしいが一人また一人と数が減ったらしいこと

商人のキャラバンが野営中ゴブリンの大群に襲われここにいるメン
バーが連れ攫われたらしいこと

後で聞いた話なのだがキャラバンというのは品物を買付けに行く
際いくつかの商人などが襲われにくくするために集まって行動する
集団のことを指すらしい

なんとかゴブリンの巢から出た俺と貴族の娘だというリーナさん、
リスティさん、がっしりした体格のベルムンドさん、商人のグルマ
さんの4人は近くの村まで一緒に行動することになった

しばらく歩くと大きな川がありその近くに村があるそうなので野営
の装備もない俺等は急ぐこととなった。

衰弱しきっていたリーナさんを背負いながら近くの村を目指した。

村の入り口に差し掛かると警備の兵士の一人がこちらを見て走って
近づいてきた。

「大丈夫ですか！酷い様子ですがどうしましたか？」

「ゴブリンの巣で捕まっていたので保護して来ました」

「わかりました、こちらへ」

その兵士さんはすぐに衰弱した人たち部屋へ寝かせるとと医術士の手配をしてくれた。

その1 R P Gの基本は情報収集から (後書き)

小説は難しいとつくづく思ってしまう。

これから主人公にはいろいろと無双してもらったりハーレムをつて
考えてるとストーリーがめっちゃくちゃになる不思議

その2ゝ回復アイテムは大事ゝ（前書き）

サブタイトルはその場の思いつき！

前回は穴に落ちてゴブリンをドーン！一人質救出！一町到着！↑イマココ

その2 回復アイテムは大事

「君が助けてくれた人たちはこちらで保護しよう、今日の宿は決まっているかい？」

商人のキャラバンがゴブリンの集団に襲われたのは一週間前らしく「ギルド」から搜索も出ていたそうだ

「いや、これから宿屋を探すんだがおススメの宿とかあるか？」

「コニード亭にするといい美人な女将さんがうまい飯を出してくれる」

兵士の一人はギルドの方に連絡しておくから明日報酬を取りに行ってくれというと別の兵士に呼ばれて行ってしまった

「うまい飯とやらを食いにコニード亭とやらを探しますか！」

夕方ということもあり店じまいを始めている姿がちらほら見える目的のコニード亭はすぐに見つかったというより看板の自己主張がはんぱなかった。

他の店の看板は木を彫って作ってあるのにここのカンバンは極彩色の光を放っていた。

「いらっしやい！泊まりなら10G食事・湯付なら20Gだよ！おや、みない顔だけどこの町は初めてかい？」

「もろもろ付でお願い、今日着いたばかりでね」

「そうかい！ようこそフューデイル1の宿コニード亭へ！」

現在の持ち金2235G 金貨が一枚100Gで銀貨が1枚50G
銅貨は一枚1Gと説明をしてくれたコニード亭の《おねーさん》は
ここの女将さんでメリルさん

食堂ではメリルさんの旦那さんであるジョーイさんが料理を作っていた

厨房の中で赤いトカゲに羽根の生えたような生物が飛び回っていた
衛生面とか大丈夫なのだろうかと気になったが他の宿泊客やジョー
イさんも気にしていないようなので放っておく事にした

晩飯はスープとパンでスープは薄味がこのあたりでは主流だそうだ。
満腹になった俺は自室に引っ込むと自分の持ち物を確認した。

ナイフっぽいもの2本

コインの入った袋

よくわからない腕輪

以上・・・

ふわふわしたベッドで眠れるのだから満足する・・・か

ベットに入っただけに眠気が襲ってきた。ZZZ・・・

「おい・・・聞こえるか○○・・・くそっナナシじゃないと通じないのか」

「ナナシ！我の声は聞こえているな」

あーはいはいばっちり聞こえてますよー

「我は貴様だ、いや貴様のなかに植えつけられた種というべきか」

種？そのうち俺の体を食い破って成長するの？

「いや実際の貴様の体の中にいるわけではない、貴様が出会った生物がいたであろうあやつの能力は《あの生物が》望んだモノを相手に与える代わりに対となす同等の何かを相手に与えるというものでな」

ナニソレコワイ勝手に与えてその分料金を払えって詐欺みたいな能力

「今のところわかるのはやつがきさまに与えたのは「解説」と「俺様」くらいだな対となすのは「貴様の名」と「不運」と「俺様」だな」

うん、おかしいね！やつの与えた「俺様」とその対の「俺様」ってなによ

「我には能力がありそれには反動もあるとそういうことだ、おそら

く貴様も同様の能力が使えるはずなのだがそのうちわかることだ」

いまいち納得いかんのだが・・・ところでさっきから俺と話してるあんたは誰だ？

「我は貴様に廃k・・・いや与えられたモノもとより名など無い」

今廃棄って言ったよあの生物俺の中に自分にはやっかいなものだから廃棄していったのかよ

あんたじゃ味気ないなよし！『レオ』って呼んでやろう自分でも我って言ってるし

「いいだろう！我、レオはいつも貴様ともにある今はこのような時でなければ会話もできんがいつか語り合える時もこよう」

朝か・・・

今日も一日世界が平和でありますように

山賊とかゴブリンとかファンタジーはそれほどお呼びでないんだよね実際のゴブリンは思った以上に気持ち悪くて全力で「殺し」にいったんだよねえ

ちなみに俺はふつーの一般人であって伝説の暗殺一家の息子だとか
凄腕の殺し屋でもないただの人だ

ライトノベルとゲームを好み友人と《拳で》騙りあたりする普通の
人だ。

さてご飯でも食べて「ギルド」とやらに行ってみるか！

【ギルド】モンスターの討伐・捕獲から家の掃除の手伝いなど数多くの依頼を冒険者等に紹介する仲介屋、各地に点在しその地域に合った依頼があるFから始まりSまでのランクがありそのレベルに応じた依頼を達成し一定額を納めることでギルドランクを上げることができる。当然ランクが上に上がるほど難易度・報酬も上がっていく

ギルドに行くと中には入るとたくさんの方の合間をすり抜けるようにしてカウンターの前へ

「すみません！昨日守護隊の人にここへ来るように言われてたのですが」

「はいーゴブリンの巣から救助なさった方ですねー」

受付のおねーさんはとてもほんわかしていて話していると周りの時間ゆっくり進んでいる気がする

「えーつとおギルドにー登録はーされてますかー？」

おお！揺れた！おねーさんが笑顔で小首を傾げた瞬間たわわな果実がユサツと揺れたのを俺は見逃さなかった

「と、登録はしてないんだ」

おつといけないいけない慌てて声が上ずってしまった、あくまで紳士的に、紳士的に

あ、おねーさんも笑ってる・・・

「ではーこちらのー登録用紙にー記入してーくださいねー」

おお、我様の言ってた【解説】のおかげなのか文字が読めるそして書ける！

「ではーこちらへーどーぞーこの水晶にー手をーかざしてーしばらくーおまちーくださいねー」

水晶にしばらく手をかざしていると水晶の中心が黒く濁りだした

ナナシさんのおランクはあFランクからあスタートとおなりますうギルドカードはあ明日に完成しますのでえまた明日来て下さいねえ依頼は今からでもお受けることができますよおとのことだった

疲れるあの間延びしたしゃべり方とっても疲れる

ゴブリンの方の報酬は300Gで依頼としてはFランクの依頼だっ

たそうだ。

ギルド加入の際に粗品としてもらったこの手甲付のグローブそれなりに使いやすそうなので装備して出店でも見て回ろうかなとギルドから出たところで声をかけられ振り向くと

キラキラの宝石がたくさんついた派手な鎧を来た剣士とケバイ化粧のねーちゃん、大剣を持った剣士の三人組が立っていた

「俺様はレイナルドⅡスフィーリアス！スフィーリアス伯爵家の次男である」

「私共はレイナルド様に使えておりますレイリアと」

「バルガスと申します」

「どうも、ナナシです」

伯爵ってどのくらい高い地位だっけかな

「やあやあナナシくん！君はとても運がいい！この私はこれからオーク討伐の依頼でダンジョンに行くのだが君も一緒に来ないかね？」

俺の見立てが正しければ盾か雑用を探していてちょうどいいところにFランク《新米冒険者》の俺が来たってところか

「報酬は300G、薬草とこの盾は前報酬であげよう」

まあダンジョンとやらの興味が無いわけでもないから着いていってみるかな

「いいですよ！ただ道具を入れるバックが無いので買ってきます」

「いいだろうではこちらで依頼をしておくので東門の所で落ち合うことにしよう」

いろんな店があるけどバックなんてどこで売ってるんだろう

おお！獣耳の美人さんを発見した！あの人に道を聞いてみよう

「すみません！道具屋ってどこにあるかわかりますか？」

おや？このおねーさん驚いているように見えるんだけどなんでかな
俺変な事言ったかな？

「私は獣人族だよ？」

「そうなんですかーかわいい耳ですね」

顔が真っ赤になってうつむいてる姿もいいです！

獣耳、少し褐色肌、金色の髪、ライトブルーの瞳そしてもっふもふ
のしっぽ！

いいよね！尻尾を持つものは正義だよね！

「あっちに・・・道具屋があるよ」

「ありがと！おねーさんの名前は？」

「・・・イスカ」

「俺の名前はナナシ！」

と自己紹介したところで彼女がビクツと震える

「・・・どうしたの？」

「なんでもないの・・・またねナナシ君」

彼女は駆け足で人ごみの中へ消えていった。

どうしたんだろ・・・何か用事でもあったかな？とりあえず道具屋へ行こう

「いらっしやーせー！ランタンから回復薬まで何でも揃うボルドー商会だよー」

あつっ！？あの店の周りだけ人が逃げてるよ・・・

「すみませーん」

「はい！いつもニコニコボルドー商会！今日のお求めは何でしょ

うか！本日はランプ油がとてもお買い得となっております！さあ！お客様は私どもの店に何をお求めになってまいられたのでしょうか！」

ごめん、ちょっとこわい、ものすごい勢いでしゃべってるよこのおにーさん

「今日冒険者になったんですがバッグとか必要なものを買いに来たんですが」

ざわ・・・

離れてこちらをみていた人たちが一斉にざわめきだした

「かわいそうに」 「誰だよ初心者にボルドーさんどこ教えたの」

「私今使える最上位の回復魔法用意しとくからね」

「あのおねーさんの下着は黒だった」

よし、わかった・・・とりあえず最後の人その話を詳しく聞こうか！

じゃなかった・・・おや目の前のボルドーさんがガッツポーズのよ
うな感じでフルフル震えている

「我らボルドー商会！」

ん？後ろから声が・・・

「いついかなる時でも」

「お客様第一に考え」

「いつでも安全な商品を」

「お届けいたします！」

おい・・・どこの戦隊物ですか？爆発したよ？ボルドーさん後ろにいたはずなのにいつの間にそこに？

「ボルドーさんの爆発が控えめだど！？」
「おいおい・・・明日フェーデル壊滅か？」

「いやまて！まだ終わったわけじゃない」
「あれは幻のF！？アレの為なら牢屋に入ることも厭わない！」

最後の人！待てそのFを掴むのはおr・・・ゲフンゲフン確かにFは魅力的であるがいきなりおさわりは犯罪だ！ここは一言「素敵な胸ですね！揉ませていただけませんか？」と断りを入れるべきだ！

「そうだったな・・・ありがとう同士よ・・・」

言葉に出てないのに通じちゃったよ・・・

「お客様！失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？」

「ああ、ナナシといいます」

「ナナシ様！私どもボルドー商会は今後貴方様と友好な関係を築いていけると確信しております！」

「お求めの商品ですがこちらなどはいかがでしょうか！」

「商品A―15をここへ！」
「「「よろこんで！！！」」」

もうここ道具屋じゃないよね

「こちらの商品は冒険者必須のバッグから水、薬草、野営装備など基本装備一式が詰まってお値段なんと500G！」

高いのか安いのかさっぱりわからん

「おや、ナナシ様この商品少し高いんじゃないかという顔をなされてますね！さすが！冒険者様！私どもも商人その駆け引きは忘れておりません！いつもなら500Gのこの商品！今回はなんと300Gにて御提供させていただきます！」

一気に200Gも減ったよ

「さらに！」

まだ何かあるのかよ

「今ならこのランプ油と戦闘でも採取でもどんなに乱暴に使っても切れ味の落ちにくい万能ナイフもつけてお値段そのまま300G！これでいかがでしょうか！」

すでに赤字じゃないのかこれ・・・

「あの、こ「んー！ナナシ様は商売上でいらっしゃる！仕方ありません！さらにこの雨をはじき寒さか身を守るのにとっても役立つコー

トを3枚つけましょう」

あーうんこんなにつけて大丈夫なのかって聞こうとしたんだけどコ
ートついちゃったよ

「・・・それでいいです」

「」「」「ありがとうございますあ！」「」「」

商人こえええ・・・

ゴブリンを倒したお金は飛んだけどいっぱいつけてもらえたしまあ
いいか

さて東門へ行こうか

その日、フェーデイルの村で「胸を揉ませてください」と言いなが
ら魔法使いの胸をつかんで黒こげとなり全治一週間の怪我を負った
勇者がいたと翌日の朝刊で広まった

その2 回復アイテムは大事 (後書き)

商人が元気になりすぎました

獣耳っていいよね・・・上目遣い涙目で獣耳たまりませんね・・・

さて次は伯爵さまとダンジョンです

どうするかなそろそろエロス&グロ交えていかないとテンションが持たないね

その3 戦闘開始 (前書き)

人物紹介ってひつ・・ようかな？

その3　戦闘開始

「まだ来ないのか？くそっ！あのガキこのレイナルド様を待たせるとは！これも貴様があのガキを使えば楽にダンジョンを進められるというから入れてやったというのに・・・」

「申し訳ありません」

この貴族様・レイナルドⅡスフィリアスが東門についたのは3分程前だというのに従者とこのやり取りをすでに5回以上も繰り返している・・・従者ってのはよほどMな精神の持ち主か大きすぎる器の持ち主でないとできない仕事だと門番は思い出した頃にナナシがやってきた。

「お待ちせしました」

「遅いぞ！さっさとダンジョンへ行くぞ！」

「かしこまりました」

ダンジョンとは世界が自然と生み出した洞窟のようなもので気付いた時にはそこにあったとされるためいつ誰がどのようにしてダンジョンを作っているのかは定かでない。

目当てのダンジョンは町の近くにあるらしいのでそこまで歩いていくこととなったがダンジョンに着くまでレイナルドの「俺様ってすごいだろ話」を延々と聞く事となり戦闘が始まる前から気疲れしてしまった。

「よし！ここが『力』のダンジョンだ！よし！ナナシ貴様から先にダンジョンに入れ！」

「入れといわれても入り口が無いんだけど」

「・・・それに触れれば入れる」

ダンジョンの入り口は小さなオブジェのようなもので手で触れると自分の周りが輝いたと思ったら次の瞬間には洞窟の中にいた。

そのあと俺、バルガス、レイリア、レオナルドの順に入ると持ってきたランプをつけて歩き出した。

今回はゴブリンのときとは違って盾があり初PT戦だったがレイナルドのくだらない話の合間にダンジョンの様子聞いていたおかげでぼんやりと理解していた。

地下1階はゴブリン、スライム、大蝙蝠などのモンスターで1対1なら俺でもなんとか倒せるレベルだった

このときはまだ自分が囿としてこのPTにいれられたことを理解していなかった。

地下2階へを降りていくと大広間があり入って数歩進んだところにソレはいた。

2mほどの高さのゴブリンのような姿、防具のようなものを身にまとい、口から垂れた唾液、手に持った棍棒・・・アレがオークか

「一匹だけか俺様にかかれば楽勝じゃないか！お前ら！俺様の勇姿をみてろよ！」

とレイナルドが剣を抜いて切りかかる

「くらええ！」

バキン！

音を文字に表すとそんな感じだろうか

レイナルドの剣はオークに傷つけることなく折れてしまった。

ブオオオオオオ！

「グホッ！」

オークの一撃でレイナルドが吹き飛び壁に叩き付けられる自慢の鎧はオークの一撃で丸い凹みが見えた

「レイリス！坊ちゃまを！ナナシ！行くぞ！」

バルガスさんが叫ぶのに従い、オークへ駆け寄る近くで見るとさらに大きく見える。

ここに来るまでに学んだ事、俺の役割は相手をひきつけておいてバルガスさん達の攻撃のチャンスを作ること、なのでナイフっぽいものでオークを切りつける折れはしなかったもののダメージもほとんどなさそうだ。

「避ける！」

バルガスさんの声が響いているが俺はとっさに盾を構えてしまった。オークの一撃は盾を砕き、レイナルドとは逆方向へ吹き飛ばされた。バルガスさんの大剣がオークの頭を粉碎し、オークの巨体が倒れる。バルガスさんはオークを倒した証拠としてオークの素材を剥ぎ取っていく、へこみのできた鎧を着けたレイナルドがレイリスさんと共にこちらへやってくる。

「おい貴様！ 貴様のせいで俺のこの剣は折れ、鎧はこの通りへこんでしまったではないか！ すべて貴様のせいだ！」

見ていろって言ったのは自分ですよ？

「この剣と鎧の修理代として10万G払え！」

おいおい、そんな金持ってるわけ無いだろ？ 俺は初心者冒険者だぜ？ 2235Gしか持っていないぜ？

「そんな金持ってるわけ無いだろ？」

「これだから庶民は・・・貴様はこれから俺の奴隷としてこき使ってやる！」

ナニソレそろそろキレてもいいよな

「お！ あんなどころに宝箱があるではないか！ 見つけたのは俺様だから中身も俺様のものだ！」

宝箱に目掛けて走っていくクソ貴族様、毒針でもささって死なないかな・・・。

「レイナルド様！ いけません！」

バルガスさんが制止をかけるがそれを聞かずに宝箱を開けるレイナルド

「中身は・・・」

カチッ

カリカリカリカリカリカリカリカリ・・・

壁の一部が開いていくのと同時に入り口が閉じていき、開いた所からオーク数匹のオークが押し寄せてくる。

「うわああああ」

レイナルドは叫びながらこちらへ戻ろうとしているが慌てすぎてこけてしまう。

《アイスバレット》 【双断】

レイリアさんは氷の弾丸を打ち出しバルガスさんは大剣を振るうがオークの数が多く押され気味である。

四方をオークの群れに囲まれてしまった俺達に

「坊ちゃま！ このままでは全滅です！ 撤退しましょう！」
バルガスさんがクソ貴族に進言するが

「俺様がオークごときを相手に逃げれるか！」

と突っぱねてしまう。

そこへひととき大きく紫のオークが現われた。

周りにいたオークは雄たけびを上げるだけで仕掛けてこないようになり紫のオークがどんどん近づいてくる。

「デイスオークだど！？このダンジョンにそんなモンスターはいなかったはずだ！」

バルガスさんは舌打すると剣を構えてデイスオークに向かっていく！
剣を振り下ろした時

何が起きたかわからなかった

大剣が折れて飛び

バルガスさんの体が粉々に砕ける。

デイスオークは持っていた剣を振っただけだった。

一番近くにいた俺は血飛沫を浴びてしまっていた、とても金臭い匂いがあたりに充満している。

「レイリス！あいつにオークどものが集中している今のうちに逃げろぞ！」

レイナルドとレイリスは水晶のようなものを持つと一瞬まばゆい光を出して消えてしまった。

オークたちの笑い声が響く

残るは俺とオーク達だけ

俺はまだ死にたくは無い、怪我は無いが恐怖で体が動かない。

震える足で立つと

ふっと静まり返る・・・

「貴様は逃げないのか？」

見た目はオークというモンスターなのに人の言葉を話している

「ひ、人の言葉を話すのか？」

声は上ずっていたが通じるだろう、足がガクガクしている

「人の言葉を話しているわけではない、人間！貴様は俺の言葉がわかるようだな」

楽しそうに笑うオークは不気味である。

「先ほど貴様達が殺した亡き戦友の弔いとして貴様を殺す」

ブウオオオオオオオ！！

雄たけびと共に突っ込んでくるデイスオーク！唯一の武器であるナイフのようなものを構える。

周りはオークに囲まれていて逃げることは不可能、なら近づく！

俺のナイフをデイスオークの胸に突き立てるがデイスオークの剣は俺の体を貫いていた。

体から力が抜けていく・・・

とてもここは寒い・・・

体のそこから凍えていくようだ・・・

・・・おいおい、まだ敵は生きてるんだぞ？もう終わるか？

だって俺、剣で刺されたんだから、死んだんじゃないのか？

俺様の体があんな鈍らで斬られた程度で死ぬ体なわけないだろ？

ちっ！しゃーねーなー！お前に自分の体の使い方を見せてやるよ・・・
・ちゃんと《視て》るんだぜ！

「貴様如きでは傷もつけれんと思ったが、俺にナイフを突き立てるとはなだがこの程度かすり傷でしかないわ」

デイスオークが笑う、周りのオークたちもそれにつられて笑う

「そうか、ならば二回戦を始めようか」

剣で貫かれたはずの体から紡がれた声にすべてのオーク達から驚きを隠せなかった。

「馬鹿な・・・俺は貴様を貫き確かに殺したはず・・・」

「そうだな、確かに貴様は体を貫いた」

「ならばなぜ貴様が生きている」

「体を貫いた程度で俺が死ぬと思ってるのか？」

カカカと笑う、この異様にはこの部屋にいるすべての生き物が恐怖した。

「貫いて死なぬのならば！粉々に砕いてくれる！」

デイスオークが剣抜き走っていく

「これで砕け散れええ！《剛腕爆碎》」

爆音ともに周囲に砂煙が立ち込めるデイスオークの剣は床に大きなクレーターを残す

周囲を囲んだすべてのオークがデイスオークの勝利を確信した今度こそあの人間は粉々になったと

砂煙がおさまっていくとうつすらとデイスオークの姿が見え出した
剣を振り下ろした姿のままデイスオークは動かない。

「当たらなければどれだけ威力があっても無いのと変わらないのだぞ？」

砂煙がおさまった後オークたちが見たのは素手で体を貫かれたデイスオークと鱗に覆われた尻尾と額から1本の角を生やし鎧のような鱗を纏った『レオ』の姿だった。

「本調子ではないがちょうどいいデイスオーク貴様を喰らって我の魔力としてやろう」

デイスオークの姿が一瞬揺らぐと『レオ』の中へ吸い込まれていった。

「オーク程度では腹の足しにもならんな・・・ああ、安心しろ貴様ら、すぐに同じところに送ってやろう」

レオは一番近いオークに近づくと半分に引き裂いた

それを見たオークたちは我先と開いている扉へ走っていく、しかし通路は開いていて向こう側が見えているのにまるで壁でもあるかのように進むことができない。

レオはゆっくりと一番近いものから順に肉塊へ変えていった。

一面オークの屍骸で埋め尽くされた部屋で嗤う一匹の異形

数時間後にやってきたほかのPTは足の踏み場が無いほどに捨てられて
いるオークの死体を見てまるで地獄のようだとつぶやいたとい
う。

森の中

「ここは・・・町の近くかな？」

・・・おう目覚めたか！・・・

「だれ？」

・・・俺だ、レオだ！・・・

あれは夢じゃなかったのか・

・・・どーだ、人間の限界とやらは味わえたか?・・・

人間のつていうか今の俺の限界だけどね

・・・安心しな、お前にもう限界は無い・・・

限界は無いって寿命とか向き不向きとか人には越えられない壁とかあるじゃないか

・・・ナナシ今の見た目こそ人のなりをしているが今のお前はれっきとした人外だ・・・

たしかにエロスは人一倍好きであの手この手を使っていたらいつの間にかエロスの人外ってあだ名がついてたけどそれでもやっぱり人間だよ!!

・・・ナナシ、そういうことではない嘘だと思うのであればそこらの木を殴ってみよ・・・

木?これすつごく立派な木だよ?俺が三人いてようやく囲めるくらいなの、どこぞの御神木とかじゃないよね

・・・そこいらに生えてる木だ気にせず殴れ・・・

結果..木を貫通しました。

・・・というわけだ・・・

木が倒れるんじゃないで貫くなんてどんな力してんだ俺。

・・・貴様はこの世界に来たときからこの力は持っておったが、
大きすぎる力は貴様の身も滅ぼすと思い、我が抑えておったのじや
が・・・

抑えてたのに？

・・・オークと戦ってる時に面倒になってな（笑）我もおるし何
かあれば起こってから何とかすればよいだろうと思ってるな・・・
面倒って、そういえばオークと戦ってた時の姿は？

・・・本来の私の姿が人の形を取ったものだ・・・

そっか、さて町でこの姿だったら不審者だよな

今現在の装備はこんな感じ

ぼろぎれに近い服胸の辺りに大きな穴

ズボンはホットパンツに近い

極め付けに全身が人間の血とオークの血でパリパリになっている

・・・このままでは無理だな、そういえば向こうに川があった
な・・・

いや血を落としてもズボンの替えなんて買っていないし

バッグはレオが回収してくれていたようだ

・・・今の貴様なら自分の魔力を変換して服程度簡単につくれるであろう？・・・

俺そんな便利なことできるの？

・・・本来のイーツとなったナナシにできぬことなどほとんどないわ・・・

ほとんどって・・・ん？イーツってなにさ？

・・・イーツとはこの世界で勇者と魔王が神の意思をはずれ世界に歪みが出た時に現われるという存在だな・・・

そのイーツとやらはその世界で何すんの？

・・・今の勇者は魔王を倒さず世代交代したとか聞いたことがあるな今は3代目だったか、そして魔王は魔王で魔物を増やし世界征服を狙っておる、通常であれば勇者が魔王を倒すもしくは負けるなどしてサイクルが回るはずだったのだが倒さないことによってサイクルが滞りおぬしもみただろう先ほどのデイスオークのような例外が多発するようになるのだ・・・

じゃあ勇者に魔王に挑戦させればいいのか

・・・何の為にイーツにこのような力があると思ってるのだ？貴

様は勇者と魔王を倒して世界を征服する神となるのだ・・・

なるのだ！じゃないよ世界征服するなら魔王でいいじゃないか

・・・今の魔王にそこまでの力はないせいぜい村を息一つで焼き
尽くす程度だ・・・

魔王こわっ！それでよわいの！？

・・・全盛期なら吐息で町4つは簡単だったな、とにかくナナシ
は世界を征服してついでに神を殺っちゃえばそれでいい・・・

神様の殺害を殺っちゃえて軽くないか？

・・・まあこの世界の神は概念だけであって意思などないからな・
・

と話をしている間に川についたな

流れも緩やかだしもぐってみるか魚が取れたらいいな

・・・そつと掴むんだぞ今のお前は粉々に砕きかねないからな・
・

お、おう

そーつと・・・

そーつと・・・・・・・・

ここだあ！

・・・・・・・・ここだあ！じゃないほらみてみる見事に魚の跡形も無いぞ、
今なら魚の動きが簡単に追えるだろうに・・・・

人のときの感覚でやっちゃうんだ☆

・・・・・・・・こんなことでは女性の手もおちおち握れぬな・・・・

うおおお！ソフトに！やわからかに！相手を傷つぬよう我が手は栄光
を掴み取る！

・・・・・・・・わざわざ無駄に魔力を使って時を止めて魚を掴むでない・
・

ご飯ゲットー！生・・・・は怖いから火を起こさないと
荷物から火打石を出そうとしたところで

・・・・・・・・火もだせぬ男など女性は歯牙にもかけぬであろうな・・・・

はあああああ！俺の魔力よ！炎なって燃え上がれええええ！バァー
ニーング！

何も起きなかった。叫んだ俺の声はむなしく轟いた。少し恥ずかし
かった。

・・・・・・・・そういえば、ナナシには魔法の使い方の説明をしてなかつ
たな、ナナシの場合だと、【対象】【現象】【時間】さえ頭の中で

イメージできれば魔力の方が勝手に行ってくれるだろう……

ではもう一度、《魔力よ！燃え上がれ！バーニング！》

空高くまで炎の柱ができました。

……魔力の伝達率がよすぎるせいか……

その後服を作りコニード亭へ帰ってきた俺はとりあえず布団へダイブして意識を手放した。

その3 戦闘開始 (後書き)

主人公チート始まります

きっとここまでがチュートリアルなんだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719y/>

痛みとウサギと追いかけて

2011年12月3日02時54分発行